The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	科学と文学のあいだで : ムージル『特性のない男』における都市空間について
Author(s)	山本, 鉄平
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2018, 52, p. 97-113
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76077
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

科学と文学のあいだで

――ムージル『特性のない男』における都市空間について――

山本　鉄平

キーワード：ムージル／『特性のない男』／都市／科学と文学／「観察者」と「遊歩者」

1　問題の設定[1)]

聖書を筆頭とするヨーロッパ文化圏のテクストは、都市という主題を幾度も語ってきた。このことは、都市が交易や経済の中心地として、また宗教や軍事の最重要拠点として、ヨーロッパの人々にとって極めて重要な場所であり続けた証左であろう。19世紀以降の文学テクストに議論を限定しても、都市が作品の欠くべからざる構成要素であることに変わりはない。産業革命ののち近代的な都市へと変貌したロンドンは、ポーやディケンズの小説のテーマとなり、同じく近代化したパリは、ゾラに代表される自然主義文学の素材となる一方で、ボードレールの詩的想像力を喚起した。ドイツ語圏を代表する大都市ベルリンとウィーンについても事情は同様である。ベルリンは、デーブリーンやベンヤミンにとっての重要なトポスであり、ウィーンという舞台を抜きにして、ドーデラーやバッハマンの文学作品を考えることは不可能であろう。

以上のように都市を語るテクストは数多く、その議論の仕方も多種多様である。しかしながら先行研究を概観すると、都市の「観察者」／「遊歩者」を巡る問題が、多くの研究に共通の論点として浮上するように思われる。それはすなわち、都市が一方では、超越的な「観察者」の視点から静的な構造と社会的機能を備えた対象として理知的に観察（あるいは構築）されてきたのに対し、近代の理性を疑問視するモデルネのテクストでは、このような現

実の外部に位置する視点が、おそらく意図的に排除されているという議論である。後者のテクストでは、都市はしばしば、その内部を徘徊し実体験する「遊歩者」の主観や身体感覚を通じて、変化を繰り返す不安的な対象として記述されるのである。両者の知覚モデルの違いについての詳細な議論は、すでに多くの研究があるためここでは差し控える。[2)] だが後者のモデルについては、遊歩者の「陶酔」状態に注目したベンヤミンの『パサージュ論』*Das Passagen-Werk*や、都市のメルクマールとして大量のヒトやモノ、または資本や情報の流入に起因する「神経への刺激」を論じたジンメルの『大都市と精神生活』*Die Großstädte und das Geistleben*（1903）といったテクストを見逃すことはできない。彼らにとって、燦爛たる都市に紛れる遊歩者の特殊な意識は、理性的な観察者による「客観性」や「普遍性」には還元されない都市のリアルな深層を垣間見させてくれる媒体として、とりわけ注意を払わなければならない重要性を帯びていたのだ。

ローベルト・ムージルの代表作『特性のない男』*Der Mann ohne Eigenschaften*（1930／1932）も、都市の「観察者」／「遊歩者」という文脈に沿って解釈される文学テクストである。1913年のウィーンを舞台にする『特性のない男』では、中欧の大都市ウィーンを巡って、上述したふたつの知覚モデルがテーマ化されている。このことは例えば、物語の冒頭ですでに示唆されている。モデルネ以前の文学テクストの多くが、都市の街並みや建築物、あるいは――ウィーンの場合にとりわけ顕著なように――歴史的にそれぞれの地区に居住する社会的な階層を、そのままの状態で写し取ることを試みたのに対し、ムージルが『特性のない男』第1巻1章で強調するのは、都市の次のような側面である。

> あらゆる大都市と同じようにこの街［ウィーン］も、不規則、物や出来事の入れ替わり、前滑り、乱れた足並み、衝突、そしてそのあいだにある底のない静寂の地点からつくられていた。また、舗装された道路と舗装されていない道路、リズムのある響き、すべてのリズム同士の永遠の

> 不調和とずれから成り立っていた。そして全体としては、家、法律、決まり、伝統という長持ちする材料でできた容器のなかで煮えたつ泡に似ていた。（GWI 10）

社会を円滑に保つための構造や制度（「家、法律、決まり、伝統」）は、確かにウィーンを構成する重要な枠組みであり、それらを記述することが都市の「ありのまま」だとする思想は、直観的には正しく思われる。しかしながらムージルは、そのような静的な構造や制度には収まりきらない「不規則」や「衝突」、もしくは「すべてのリズム同士の永遠の不調和」など、都市の移ろいやすさに視線を注いでいることが読み取れる。換言するなら、「客観的な」対象として都市を分析する妥当性をムージルは問い直しているのだ。

以上のような静的な視線に欠けているのは、言うまでもなく、大量のヒトやモノ、または資本や情報の集積がもたらす都会の流動性と、その流動性を強い刺激や喧騒として体感している生活者の身体感覚にほかならない。その感覚をベンヤミンは「陶酔」と呼び、ジンメルは「神経への刺激」と称したが、ムージルも同様に、遊歩者の朦朧とした意識状態が、固定的な枠組みに還元されない躍動的なウィーンを顕在化させてくれることを察知している。というのは、同じく『特性のない男』第1巻1章でムージルはすでに、都市の内部からなされる知覚モデルを提示しているからである。

> この［都市の］騒音を聞けば、その特色が述べられなくても、またここ数年不在であった男が目を閉じていても、自分が首都にして帝都であるウィーン市にいることを聞き分けることができる。都市は人間と同じく、その動きで判別されるものなのだ。男が目を開ければ、それぞれの特色でウィーンだと分かるよりはるか以前に、都市の動く様子で同じことが分かるだろう。（GWI 9）

クレーリーによれば、おぼろげな印象を均質な空間に組み込む近代の知覚

モデルは、人間に備わる五感のうち、なまの身体感覚を切り捨て、離れた位置から対象を再構成する視覚（「見ること」）の優位によって成立している。[3] また「窃視」のメタファーで、モダン都市の「観察者」を説明するミシェル・ド・セルトーの都市論も、基本的にはクレーリー同様、近代の知覚を「見る」という行為に結びつけている。[4] いずれにせよ、都市を調和のとれた均質な空間として考える知覚モデルは、対象から一定の距離を取った「見る」という行為に支えられているのである。そのため、『特性のない男』のこの場面で「男」が目を閉じていること、また目を開いた後も周囲の「動く様子」をただ漠然と追っていることは看過されてはならない。ここでムージルが確認しているのは、視覚による再構成を施さずとも、ウィーンという対象はまた別の技法によっても知覚されうるということなのだ。

都市の「観察者」／「遊歩者」を巡る問題は、いま述べた冒頭の部分のみならず、『特性のない男』全般に通底する基本テーマとして繰り返し扱われている。だが、似たような問題を俎上に載せる同時代のテクストとムージルのテクストとを隔てる大きな違いとして、次のことを見逃すことはできない。それは、都市を内部から記述するというインスピレーションを、ムージルは当時最先端であった自然科学の研究状況から摂取したことである。言い換えるなら、ムージルの『特性のない男』は、都市を記述する文学的戦略と、当時の科学的言説との交錯点として理解されるのだ。このような交錯は、科学と文学という両極端に位置するように見える営みを接続する稀有な試みとしても、詳しく検証されなければならないだろう。ムージルが都市を記述する文学的戦略を科学的言説とのパラレルな関係に配慮しつつ明白にすること、これこそ本稿の課題にほかならない。

2　近代科学と不確定な世界——『特性のない男』の科学史的位置付け

ムージルは、ブリュンの実科学校や工科大学で理科系の教育を受けた科学者であった。[5] そのため彼の作品からは、至る所で自然科学との接点を読み取

ることができる。「虚数」や「無限」という数学的概念を文学作品へと移植した初期の小説『寄宿生テルレスの混乱』*Die Verwirrungen der Zöglings Törless*（1906）は、自然科学の言説をムージルが文学作品へと応用したことを示す好例であろう。[6] 膨大な遺稿を残す未完の小説『特性のない男』も、もちろんその例外ではない。しかしながら、作中で都市ウィーンがどのように記述されているかという問題に焦点を当て、自然科学との交点を示す研究はそれほど多くないように思われる。

このような研究状況のなか、見逃すことの出来ないのは、フランスの科学哲学者ミシェル・セールが提出した論点である。セールは科学史と文学史との交錯を考察した『北西航路』*Le passage du Nord-ouest*（1980）で、ムージルの都市像が、世紀転換期の新しい熱力学モデルと連動していることを指摘している。セールが述べるには、リアリズム小説の元祖であるバルザックの作品が、世界を俯瞰する視点から、都市住民の身分や階級などの特性や居住地まで「ラプラスの神とまったく同じくらい巧みに、情報全部を操っている」[7] のに対し、ムージルによる都市空間は、「偶然の衝突、ぶつかり合い、無秩序、無名性」[8] に満たされている。そしてバルザックとムージル、それぞれが都市（1819年のパリと1913年のウィーン）を記述する手法は、各時代に支配的であった熱力学の理論を下敷きにしているとされる。[9]

> バルザックにおいて、首都は蒸気機関であり、全体的な作動状況の中で描写され、テクノロジーの中でまるで外部から見ているように描写されている。それはカルノーの時代だった。[…] ムジールにおいて、ウィーンというボイラーは局所的に描写されており、もはやその構造や一般的力学の中でではなく、その胎内で、器の内部で起こる複雑な、乱流の、数多い出来事の中で描写されているのである。これはボルツマンとギッブズの時代だ。[…] バルザックは、カルノーと同じくボイラーの外におり、したがって彼の蒸気機関はまたもや決定論的である。ムジールはボルツマンと同様であって、ターナーに続いてボイラーの中に入る。つ

まり、彼の蒸気機関は不確実なものである。(「ムジール」、「ギッブス」は原文のママ)[10)]

セールはつまり、決定論的なバルザックの都市像から、不確実性を考慮に入れたムージルの都市空間への変遷が、カルノーからボルツマンとギブスへと至る熱力学モデルの変化とパラレルであることを指摘しているのだ。また引用部でセールが、それぞれの熱力学体系を「観察者」という観点から再照射していることにも注意しなければならない。カルノー＝バルザックが、俯瞰的な立ち位置から世界の「全体」を「外部から」観察している一方で、ボルツマン＝ムージルは、そもそも世界を一元的な構造として外部から理解することを諦め、「器の内部」から見て「局所的に」知覚される「不確実な」世界を記述するのである。また、以上のようなセールの議論は、モーザーやカッスングの研究にも引き継がれている。[11)]世紀転換期における科学と文学の交錯点をムージルに見る彼らも、基本的にはセール同様、ムージルの都市記述が当時最先端であった熱力学モデルと対応関係にあることを論証しているのである。

しかしながら、ムージルの文学を科学史的に考える場合、ボルツマンと同時代に「見る」主体と「見られる」客体の関係を問い直した物理学者エルンスト・マッハの思想にも注意を払わなければならない。なぜなら周知のように、マッハについての論文で学位を取得したムージルの文学テクストは、マッハ思想の強い影響下にあるからだ。マッハがムージルに及ぼした影響は、『特性のない男』で記述されたウィーンを巡っても当然ながら読み取れる。以下では、マッハの科学史的な位置付けを確認しつつ、ムージルがどのようにマッハの思想を都市を記述する方法へと変換したかを検討していこう。

まずマッハ以前の物理学であるが、それは、現実外に位置する視点から、身の回りの力学現象をたとえば実体的な「質点」や「エネルギー」などの概念へ分割しようとするものであった。19世紀に入り、熱や電気などあらゆる現象の相互変換性（「エネルギー保存の法則」）が指摘されると、すべての

自然現象は、まず最も基本的な単位とみなされた「エネルギー」へと変換され、説明されるようになった。すなわち、世界は「エネルギー」などの実体的な基礎単位の総和であると信じられていたのである。19世紀を代表する物理学者ヘルムホルツは、いま述べたような古典物理学の完成者とみなされよう。[12] また、このような知の体系の特徴として強調すべきは、現象を「見る」主体を特権化していることである。なぜなら、あらゆる現象を「エネルギー」のような基礎単位に還元するには、（不完全ながらも）「神」のように超越的な視点からそのような操作を行う理知的な主体が想定されているからである。自然科学に慣れ親しんだムージルも、このような主体の存在を熟知していたはずであり、彼があるエッセイで「われわれ人類は、精神の鋭利さによって、［…］今日のような地上の支配者の位置まで発達してきた」（GWII 1143、強調はムージル）と発言していることは、このことを裏付けているだろう。

上記のようなパラダイムが支配的であった時代に現れたのが、プラハやウィーンで教鞭をとったエルンスト・マッハである。[13] マッハはまず、古典物理学が拠り所としていた等価な最小単位を、出所不明の「思考上の記号」[14] に過ぎないとして排斥する。その代わりにマッハは、「要素 Elemente（感覚 Empfindungen）」の「複合体」Komplex として世界を説明しようと試みる。マッハの言う「要素（感覚）」とは、具体的には身体が感受する「色、音、熱、圧力、時間、空間など」[15] を指し、それぞれの感覚は、別個に分離して客観視できないことに注意しなければならない。すなわち「要素（感覚）」は、19世紀の物理学を支える実体的な「質点」や「エネルギー」とは、根本的に異なる性質を備えているのである。マッハは主著『感覚の分析』*Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen*（1886）で次のように言う。

> 物質とは感性的諸要素の相対的に安定した複合体であり、またそれに対する思考上の記号だとみなす私の見方は、厭うべきものだとされる。外界は感覚の総和としてでは不充分にしか把握できないと言われることも

> ある。[…] この意見に対して、私の述べる世界も決して感覚の単なる寄せ集めではないという点に注意を促さなければならない。それどころか私は、要素の函数的関連についてはっきりと語っている。(強調はマッハ)[16)]

マッハがここで主張するのは、「要素（感覚）」は客観的に分析することが可能な数学的単位ではなく、種々の要因の「函数的関連」により、絶えず変化に晒されているということである。このように、碁盤の目のように調和のとれた古典物理学の世界をアモルフな感覚へと解体するマッハの変革は、それまでのパラダイムで特権化されていた「主体」や「自我」にも及ぶ。マッハにとって、世界は何よりもまず、常に集合離散する「要素（感覚）」としてのみ存在しているのであり、「主体」や「自我」といった実体概念も、「エネルギー」と同じく、思考を簡易化するため鋳造された虚構でしかないのである。以上が「要素一元論」と呼ばれるマッハの思想である。この思想は言うなれば、主体の明晰な意識が世界という客体を静的な構造として認識するという二元的な図式への叛逆にほかならない。主体と客体の区別が曖昧化した状態で、ただ掴み所のない感覚のみが浮遊する世界の在り方を、マッハは提示しているのだ。

マッハの「要素一元論」が、すでに多くの研究が述べるように、ムージルの文学テクストを貫く基礎理論であることを疑う余地はない。例えば『特性のない男』の次のような箇所からは、ムージルがマッハの理論を下敷きにしていたことを容易に読み取ることができる。

> この秩序は、それが装っているほどに確かなものではない。物も、自我も、形式も、原則も確実なものではなく、すべては、目には見えないが、決してとどまることのない変化を続けている。固まったものの中より、固まっていないものの中にこそ、より多くの未来がある。[…]
>
> […] エッセイがその断片的な性質上、対象をはっきりと捉えず多くの側面から取り上げるように――なぜならはっきりと捉えられた対象は、

> たちまちその広がりを失い、概念と化すからだ――彼はこれと同じやり方で、世界と自分の生をもっとも正しく見て扱うことができると信じていた。彼には行為や特性の価値、いやそれらの本質や本性でさえも、取り巻く環境や奉ずる目的に、換言するなら、それらが属しているつねに変化している全体に依存しているように思われた。（GWI 250）

ムージルが見るところ世界には、――マッハの「要素（感覚）」がそうであるように――固定化したものはひとつもない。静的な世界の秩序は、そのような世界を固定点から見る理知的な「観察者」とともに、「取り巻く環境や奉ずる目的」に、マッハの言葉で言えば、実体のない「要素の函数的関連」に解体されることをムージルは説いているのである。

このようなマッハに由来する世界像は、『特性のない男』において、都市ウィーンの記述にも適用されている。ムージルは、19世紀の物理学のようにウィーンの社会構造や建造物を高みから「精緻に」読み取ることを拒否し、都市を常に変化に晒されたアモルフな空間として記述する。その際ムージルがとりわけ注目するのが、ウィーンの街路空間に迷い込み、方向感覚を失った遊歩者の実体験である。マッハが「見る」主体と「見られる」客体がともに虚構であること、そして世界は「要素（感覚）」の不安定な複合体であることを、ある夏の日の何気ない「外出中」[17]に確信したように、ムージルも、ひとつの視点から全体化できないほど錯綜した街路空間を明るみに出すために、都市の内部をうろつく遊歩者の特殊な意識に焦点を合わせるのだ。以下では、これまで議論した科学的言説に注意を払いながら、『特性のない男』に記述されたウィーンを詳しく検証したい。

3 『特性のない男』のウィーン

3.1 客観的記述の放棄

すでに確認したように、ボルツマンの熱力学やマッハの要素一元論に倣い、

ムージルは対象を「客観的」あるいは「普遍的」に読解する知覚モデルへの不信を募らせていたのだが、この不信はまず、『特性のない男』で主人公ウルリヒが初登場する場面のモチーフを構成している。ムージルと同じくエンジニアであり、またさらに数学者でもあるウルリヒは、物語に初登場する場面で、ウィーンの郊外にある自室から移りゆく街並みを眺めている。

> 彼はいま、ひとつの窓の後ろに立って、淡い緑色のフィルターのかけたような庭の空気を通して、褐色がかった通りを見ていた。10分前から時計を手にしながら、目まぐるしい速さで視界をいっぱいにする自動車や馬車、市電や遠くから溢れ出てくる通行人の顔を数えていた。彼は激しく通り過ぎてゆく集団の速度、角度、躍動するエネルギーを概算していたのである。（GWI 12）

まず目につくのは、ウルリヒがストップウォッチを片手に、「速度」、「角度」、「エネルギー」といった物理学的記号を駆使して都市を測定していることである。ここで見られるのはまさしく、現象をのっぺりとした記号（ここでは数字）に還元すれば、世界の全てを見通せると信じていた近代的な知覚モデルであろう。ウルリヒは当初、古典物理学のパラダイムをなぞる人物として登場するのである。またこの場面で、認識の枠組みを連想させる「窓」によって区切られ、「書棚に囲まれた学者の住居によくある高貴な静けさ」（GWI 12）を漂わせる高みからウィーンが眺められていることも興味深い。「見る」行為の主体であるウルリヒの静寂な思索と、「見られる」客体であるウィーンとの間にある距離感が、物理的な仕切りによって強調されているのである。このような主格の厳密な分離は、ウルリヒにおいて「悟性による遠近法」（GWI 648）を用いた近代的な知覚モデルが作用していることを強力に示唆しているだろう。この場面でウルリヒが思い描くのは、都市で日常生活を送る人たちの細微な主観的印象を切り捨てた、極めて秩序立ったウィーンなのだ。[18)]

しかしながら、世紀転換期の物理学がボルツマンやマッハの新しい体系に

移行したように、客観的記述を遂行していたウルリヒも、「このように頭の中で計算していたのだが、やがて時計をポケットにしまいこみ、意味のないことをしたものだと確認」（GWI 12）する。つまりここでムージルは、高度に流動化したウィーンを記述するには、近代的な知覚モデルを一度見直し、全く別の知覚モデルにも焦点を当てなければならないこと、及びその探求が物語の主要なテーマであることを暗示しているのだ。そしてその方法こそ、ボルツマンやマッハの理論を下敷きにムージルがたどり着いた、都市の内部をうろつく遊歩者に焦点を合わせた都市記述にほかならない。

3.2　遊歩者の知覚

上記のように客観的な記述を放棄したムージルは、たびたび遊歩者の不安定な意識を通じて都市を記述している。以下では、『特性のない男』で特に重要と思われる箇所を取り上げ、遊歩者の知覚で構成される都市空間について考察を深めていこう。注目するのは、第2巻47章「雑踏のなかの散歩」Wandel unter Menschenである。[18] この場面では、物語の主人公であるウルリヒが、妹アガーテとともに「大都会ではどこでも見られる人の流れに［…］身を委ねて」（GWI 1096）いる。つまり、『特性のない男』冒頭で高みからの客観的記述を放棄したウルリヒは、群衆が行き交うウィーンの内部に身を晒し、「見ている」主体と「見られる」客体の線引きが曖昧化する特殊な状態で都市を体験しているのである。もちろん、透徹した個人の意識を「正常」であり「健康」とみなしてきた近代の認識論から見れば、都市の喧騒や人の流れへ身を委ねた際の意識状態は、「異常」または「病気」であると診断されるだろう。例えばル・ボンは群衆化した市民について、「文明の階段を幾つもくだって」[20] いると否定的な評価を下しているが、このような評価を当時の知識人一般が共有していたと考えて差し支えない。19世紀までは、近代的な知覚モデルのみが「正常」、それ以外の知覚モデルが「異常」とみなされていたのである。

しかしながら、極度に集積した情報や資本が、避けようもない情念の渦を

生み出し膨張するモダン都市の相貌は、その流動性を内部から体験する「異常」で「病気」な知覚を手がかりにしても照射されなければならない。なぜなら、外部からの静的な観察では、移ろいと変貌を内包する街路空間を的確に捉えることはできないからである。そのためムージルは、マッハが物理学の領域で特権的な主体を集合離散する「要素（感覚）」へと解体したように、閉鎖されたプライヴェートな個室で練り上げられる体系的思考に見切りをつけ、「異常」や「病気」と称される群衆内の断片的知覚に焦点を当てる。[21] ムージルにとって、都市の流れに身を任せる人物の意識状態こそ、ウィーンのありのままを投影する反射鏡であったのだ。このような「第二の意識状態」（GWI 117）、または「まったく思考を欠いた身体的な状態」（GWI 1097）で知覚されるウィーンは、次のように記述されている。

> 騒音は、屋根までひたす川のように、熱で薄くなった大気の中を流れていた。都市の合間で陰になっている強い日差しのなかで、通行人は、おそらく実際以上に情熱的でしかも神秘的に見えた。すべてのものが、その時どきに、自分のことをそれとなく知らせるように、どれもが一回限りで忘れがたい音を響かせ、そのような姿を見せ、そしてそのような匂いを醸し出していた。兄［ウルリヒ］と妹［アガーテ］は、この外の世界の招待にいやいや応じている訳ではなかった。（GWI 1096）

すでに述べたように、対象から距離を取った主体の能動的操作（「悟性の遠近法」）を経て初めて、都市はグリッド状の均質空間へと組み直される。この場面ではまず、このような操作を行う主体が消滅していることに注目しなければならない。合理的な秩序に還元されない「溢れかえる気分」（GWI 1102）としての都市は、群衆に身を任せ、ウィーンの「招待」を受動的に汲み取るだけのウルリヒとアガーテによって体験されるのである。マッハの言葉で言い換えるなら、引用部のウィーンは、ふたりの「自我」が能動的に働きかけた結果としてではなく、そのような「思考上の記号」が設定される以

前に、無秩序に浮遊している「要素（感覚）」の「複合体」として出現しているのである。また、このように感受されたウィーンが、聴覚や嗅覚（あるいは悟性的な操作を伴わない受動的な視覚）の働きにより知覚されていることも見逃せない。体系的な思考により均質な空間に回収される前のアモルフなウィーンは、その場の「一回限り」でしか体験されない「音」、「姿」、「匂い」といった、より断片的で局所的な刺激として出現しているのだ。世紀転換期にニーチェやフロイトと共に理性の権能を疑うムージルは、遊歩者の「異常」な意識状態に着目することで、合理的な思考では捉えられない謎めいた街並みを浮上させているのである。

以上が『特性のない男』で記述されているウィーンである。重要なのは、すでに検討したように、このような都市の記述が、分子の乱雑さと不確定性を定式化したボルツマンや、デカルト以来の主客関係を見直し、新しい物理学の体系を構築したマッハなどの影響下に成立していることである。多くのモデルネのテクストが都市を体験する遊歩者の知覚を重視するなか、科学と文学を結びつけているという点において、ムージル『特性のない男』は他のテクストにはない特異性を示しているのである。

4　結びにかえて

本稿では、都市という主題を巡って、ムージル『特性のない男』と科学的言説との交錯点を検討した。ボルツマンやマッハの衣鉢を継ぐ科学者＝文学者ムージルは、彼らの物理学的思想を、ウィーンの流動性を記述する文学的戦略へと昇華したのである。それでは最後に、本稿で充分に議論できなかった点を確認し、今後の課題を浮き彫りにしておこう。

まず確認しておくべきことは、科学的言説を経由したムージルの都市記述が、図らずも、1990年代以降の都市論を方向づけた「空間論的転回」Spatial turnの議論に接近していることである。1990年代以降の都市論は、ルフェーヴルやミシェル・ド・セルトーの議論を参考に、居住者の〈身体〉のレベル

で体験される「生きられた空間」としての都市を再考した。これらの議論が言及するのは、生気溢れる〈身体〉での都市体験が、合理的に整備された都市のシステムに裂け目を入れ、夢やエロスと結びつく謎めいた街路空間を出現させることである。[22] 以上のような論点と対応して、『特性のない男』で記述された遊歩者の知覚も、上記のような〈身体〉レベルで体験される「生きられた空間」と類比的な機能を内包していると考えられる。なぜなら本稿で検討したように、ムージルは都市の内部をうろつく人物の意識に、既成の社会構造を穿ちアモルフな都市空間を出現させる契機を見出しているからである。硬直化した都市像を、非合理性を宿した〈身体〉的な空間へ導くこのようなダイナミズムは、遊歩者の知覚の重要な機能として、さらに議論されなければならないであろう。

また以上のような議論の折には、記述される都市――『特性のない男』の場合は1913年のウィーン――の具体的な特徴についても考慮されなければならない。というのは、乱然とした都市空間に道筋をつける合理的な構造や制度と、そのような枠組みを相対化する〈身体〉とのせめぎ合いは、当然のことながら、それぞれの都市で異なる様相を呈しているからである。言い換えるなら、ロンドンを記述する文学テクストには、ロンドンに固有の歴史的背景に根ざした都市空間が描かれ、パリを記述するテクストには、パリでしか結実し得なかった力関係が表現されているのである。『特性のない男』の場合には、リングシュトラーセや当時の法体系など、ムージルが丹念に書き込んだウィーンの街並みや制度と、そのような枠組みを異化する生活者の〈身体〉との具体的なせめぎ合いが、分析されなければならない。[23] 言い換えるなら、本稿の議論を足がかりに、具体的な街並みや制度とのリアリティ溢れるせめぎ合いのなかで、〈身体〉レベルで知覚される都市ウィーンの相貌を作品から浮き彫りにする作業が、今後の課題として求められているのである。

［注］

1） ムージルのテクストとしてはMusil, Robert: *Gesammelte Werke.* B. 1, 2. Adolf Frisé (Hg.). Reinbek bei Hamburg 1978 を使用し、引用の際には、( ) 内に巻数とページ番号を併記する。
2） このような議論については、Scherpe, Klaus (Hg.): *Unwirklichkeit der Städte: Großstadtdarstellungen zwischen Moderne und Postmoderne*. Reinbek bei Hamburg 1988 やパイク、パートン『近代文学と都市』（松村昌家訳）、研究社出版 1987 年に詳しい。
3） クレーリー、ジョナサン『観察者の系譜：視覚空間の変容とモダニティ』（遠藤知巳訳）、以文社 2005 年、11–48 ページ参照。
4） Vgl. Certeau, Michel de: *The Practice of Everyday Life*, übers. v. Steven F. Rendall, Berkeley, Los Angeles, London 1984, S. 91–110.
5） Vgl. Corino, Karl: *Robert Musil. Eine Biographie.* Reinbek bei Hamburg 2003, S. 121–218.
6） 例えばムージルの日記には、「複素数と四元数」というタイトルで数式に埋められたページが存在する。Vgl. Musil, Robert: *Tagebücher*. Adolf Frisé (Hg.). Reinbek bei Hamburg 1983, S. 299–301.
7） セール、ミシェル『北西航路（ヘルメス 5）』（青木研二訳）、法政大学出版局 1991 年、56 ページ。
8） 同上、59 ページ。
9） たとえばガンパーは、世紀転換期における科学、技術、メディア分野の変革と文学との関係について言及している。Vgl. Gamper, Michael: „Einleitung “. In: Ulrich Johannes Beil, Michael Gamper, Karl Wagner (Hg.): *Medien, Technik, Wissenschaft. Wissensübertragung bei Robert Musil und in seiner Zeit*. Zürich 2011, S. 7–14, hier, S. 7f.
10） セール前掲書、57 ページ以下。
11） Vgl. Moser, Walter: „Zwischen Literatur und Wissenschaft. Zu Robert Musils Essayismus“. In: Jacques Le Rider, Gérard Raulet (Hg.): *Die Verabschiedung der (Post)Moderne*. Tübingen 1987, S. 167–196, „Zur Erforschung des modernen Menschen. Die wissenschaftliche Figuration der Metropole in Musils *Der Mann ohne Eigenschaften*“. In: Thomas Steinfeld, Heidrun Suhr (Hg.): *In der großen Stadt. Die Metropole als kulturtheoretische Kategorie*. Frankfurt am Main 1990, S. 109–131, Kassung, Christian: *Entropie-Geschichten. Robert Musils „Der Mann ohne Eigenschaften“ im Diskurs der modernen Physik.* München 2001, S. 263–470.

12）木田元『マッハとニーチェ――世紀転換期思想史』、講談社 2014 年、30–63 ページを参照。

13）マッハ思想の科学史・文化史的意義については、ジョンストン、ウィリアム M.『ウィーン精神――ハープスブルク帝国の思想と社会 1 』（井上修一訳）、みすず書房 1986 年、249–404 ページ、野家啓一『無根拠からの出発』、勁草書房 2003 年、3–79 ページなどを参照。

14）Mach, Ernst: *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen.* Jena 1922, S. 23.

15）Ebd., S. 1.

16）Ebd., S. 296.

17）マッハはこの神秘的な体験について次のように述べている。「ある晴れた夏の日、外にいると、世界が私の自我と一緒になって、突然、組み合わさった感覚の塊のように思えた」。Ebd., S. 24.

18）このように合理化された都市像として、19 世紀中頃にオスマンが改造したパリや、社会主義者が思い描くユートピア都市を想定することもできるだろう。

19）遊歩者の知覚については、第 1 巻 120 章「平行運動が暴動を引き起こす」、第 2 巻 8 章「ふたり家族」、第 2 巻 22 章「コニアトフスキーのダニエル理論批判から原罪へ。原罪から妹の感情の謎へ」も注目に値する。

20）ル・ボン、ギュスターヴ『群集心理』（櫻井成夫訳）、講談社 2016 年、35 ページ。

21）このような知覚モデルは、エッセイ「新しい美学の端緒――映画のドラマトゥルギーのための覚え書き」*Ansätze zur neuen Ästhetik. Bemerkungen über eine Dramaturgie des Films* で詳しく理論化されている。ムージルにとって、「実証的な、因果律的な、機械的な思考」（GWII 1143）を「平衡障害」（GWII 1140）に至らせ、「自我と融合した一連の諸体験」（GWII 1153）としての世界を表現するメディアこそが芸術作品なのである。

22）1990 年代以降の都市論と「空間論的転回」については、吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』、人文書院 2003 年、132–174 ページ、近森高明『ベンヤミンの迷宮都市――都市のモダニティと陶酔経験』、世界思想社 2007 年、200–217 ページを参照。

23）『特性のない男』に記述されたウィーンの街並みについては、Polheim, Karl Konrad: „Das Bild Wiens im Werk Robert Musils“. In: *Literatur und Kritik* 20 (1985), H. 191／192, S. 37–48 に詳しい。

（大学院博士後期課程学生）

Resümee

Wissenschaft und Literatur: Über die Darstellungsweise des Stadtraums in Robert Musils *Der Mann ohne Eigenschaften*

Teppei YAMAMOTO

Die Großstadt ist ein konstitutives Thema des europäischen Romans im 19. und 20. Jahrhundert. Der Metropolraum Wien als politischer, kultureller, ökonomischer und religiöser Mittelpunkt spielt auch in Robert Musils epochenmachendem Roman *Der Mann ohne Eigenschaften* eine zentrale Rolle. Bemerkenswert dabei ist, dass Musil das Panorama der Stadt nach zwei unterschiedlichen Wahrnehmungsmodellen beschreibt: Einerseits wird Wien von außen als stillstehendes Objekt beobachtet, andererseits von innen als unkontrollierbares Labyrinth erlebt. Wie Benjamin und Simmel legt Musil offenbar größeren Wert auf das zweite Modell, weil man mit dem ersten Modell, in dem die lebendige Perspektive der wirklichen Städter fehlt, die Dynamik der modernen Großstadt nicht präzise erfassen kann. Hier stellt sich eine wesentliche Frage: Wie ist Musil auf das zweite Modell gekommen? Nach Studien von Serres (1980), Moser (1987, 1990) und Kassung (2001) habe sich Musil, der sich als Ingenieur und Wissenschaftler im Paradigmenwechseln in der Naturwissenschaft um die Jahrhundertwende gut auskennt, mithilfe neuartiger Theoriebildungen ein eigenes Beschreibungsmodell erarbeitet. In diesem Aufsatz zeige ich zuerst, in welchen Punkten einige der wichtigen Theorien in der damaligen Naturwissenschaft, vor allem die statistische Thermodynamik von Ludwig Boltzmann und Willard Gibbs und der Empiriokritizismus von Ernst Mach, innovativ waren. Im Anschluss daran analysiere ich einige konkrete Szenen im *Mann ohne Eigenschaften*, um den Einfluss der oben genannten wissenschaftlichen Diskurse auf Musils literarische Stadtbeschreibungsweise zu verdeutlichen.